

JAIST Integrated Report **BEYOND**

Building Excellence, Yielding Originality, Nurturing Talents, and Developing Co-Creation

北陸先端科学技術大学院大学にご支援いただいている皆さまへ

北陸先端科学技術大学院大学（JAIST：Japan Advanced Institute of Science and Technology）は、独自のキャンパスと教育研究組織を持つ、日本で最初の国立大学院大学として1990年10月に創設されました。

創設の経緯としては、1987年の臨時教育審議会の第二次答申で具体化した先端科学技術大学院大学構想を基に、石川県が候補地として浮上し、辰口町（現能美市）に建設されることになりました。その背景には、当時の松崎従成辰口町長の強い熱意や、文部大臣を務められた地元選出の森喜朗元内閣総理大臣の大きな働きかけと共に、後に北陸経済連合会を通じて多額のご寄付をいただいた地元企業による力強いご支援がありました。

本学の創設にあたり、創設準備委員会がまとめた「北陸先端科学技術大学院大学の構想の概要について（最終まとめ）」では、「先端科学技術分野に係る高度の基礎研究を推進するとともに、大学等の研究者の養成のみならず、企業等において先端科学技術分野の研究開発等を担う高度の研究者、技術者等の組織的な養成及び再教育を行うこと」が創設の目的として述べられており、この精神は、2021

年1月と2026年4月にそれぞれ策定した「JAIST未来ビジョン」、「JAIST未来ビジョンBEYOND」にも継承されています。

本学は、創設以来、最先端の研究を通じた教育（人材育成）と社会貢献を重視する方向性を打ち出し、国内外から集まった優秀な研究者による世界水準の研究を通じて10,000人を超える有為な人材を育成し、研究と教育両面で社会に貢献してきました。

大学の在り方が問われる昨今、本学は大学院大学として、研究大学として、また地域活性化の中核として、その使命を果たすための新たな取組を行ってきました。2014年には、「北陸地域の活性化を目指した新産業創出と人材育成」をビジョンに掲げた北陸発の産学官金連携マッチングイベント「Matching HUB Hokuriku」を開始しました。2016年には従前の3研究科から、既存の分野の枠を超えた9領域からなる1研究科へと改組しました。また、エビデンスに基づいた研究力分析を取り入れ、2022年4月に第4期中期目標・中期計画のスタートに合わせて新たに10研究領域へと再編しました。

新構想大学として誕生した本学は、常に時代の先端を走る使命を持ち、それにふさわしい変革と成熟を遂げていく必要があります。

CONTENTS

Overview

大学概要

03 数字でみるJAIST

05 ビジョン

07 ビジュアル
アイデンティティ(VI)

研究を通じた教育と社会貢献を基盤とした本学独自の文化を育みつつ、大学における無形の価値を顕在化し、未来への可能性について広く発信していきたいと考えています。

この「統合報告書2026」は、本学の取組についてわかりやすく紹介するとともに、大学運営に係る情報も掲載しています。本学の基本データを掲載した「大学概要」とともにご覧いただき、本学についてより深く知っていただく機会となれば幸いです。

本学は、自然豊かで、歴史と伝統、文化と芸術に優れた石川の地において、最先端の科学技術を究め、その成果を通じて学生を育て地域に貢献するとともに、国内外のステークホルダーの皆様との調和と共創、共栄に努めてまいります。

これまで本学の活動にご援助ご協力を賜った皆様に感謝するとともに、今後一層のご支援をお願いする次第です。

北陸先端科学技術大学院大学長

寺野 稔



Dialogue

対談

- 09 対談
変革の時代に
大学はどう進化するか

Performance

活動状況

- 15 研究
21 教育
25 学生支援
27 社会貢献
31 経営
33 JAISTトピックス

Finance

財務状況

- 37 財務
41 JAIST基金・同窓会



PEOPLE

学びと学生



学生数

1,132人

2026年5月1日現在



教職員数

311人

2026年5月1日現在



修了者数

10,122人

2025年度末



就職率

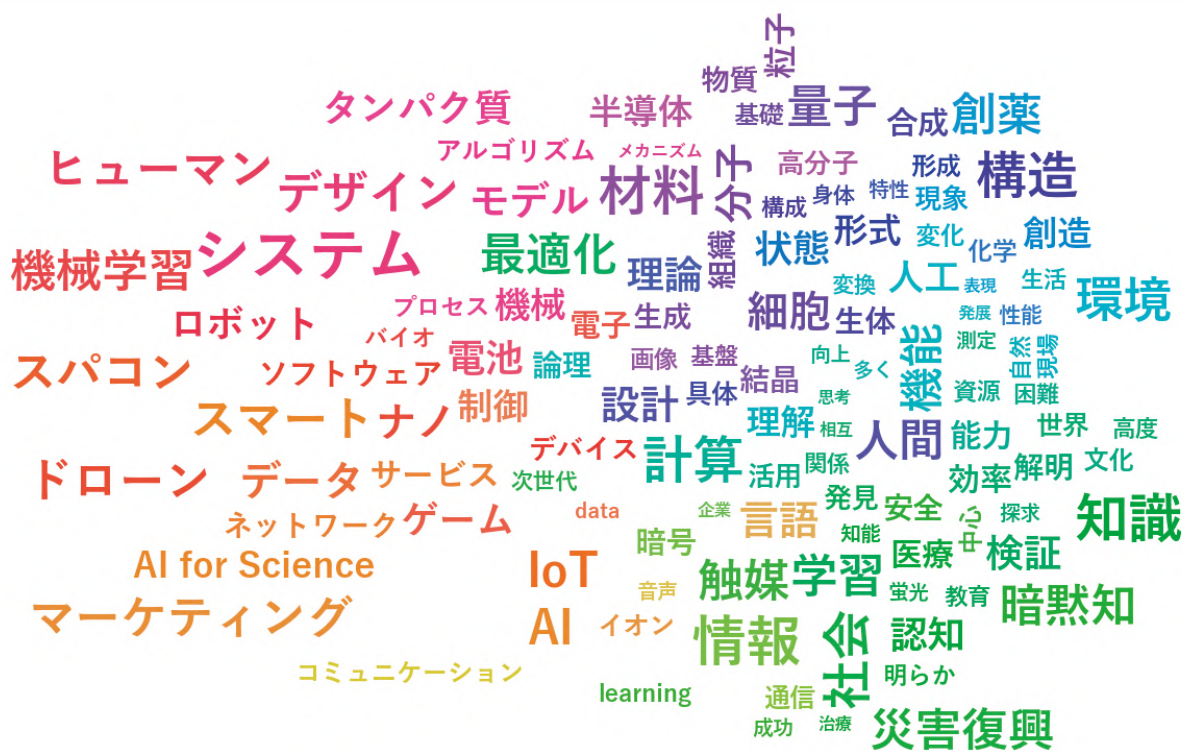
93%

2025年度

RESEARCH

研究と技術革新

研究の主たるトピック・ワードクラウド



国際共著論文数

計算機科学・人工知能カテゴリ
国内大学中

1位

出典: 文部科学省科学技術・学術政策研究所(NISTEP)による調査(2024年6月発行)
「研究論文に着目した日独英の大学ベンチマーキング2023(調査対象期間2017-2021年)」



被引用トップ10%論文数

440編

2016~2025年 出典: Elsevier社©SciVal



国際共著論文比率

46.0%

出典: 大学ランキング2027年版(朝日新聞出版)

国内
全大学中

8位

全国立大学中

3位



開学

1990 年



土地面積

113,063 m²東京ドーム
2.4 個分

蔵書数

162,961 冊

2026年3月31日現在



総資産

19,635 百万円

2026年3月31日現在



電子図書館サービス

5,721 タイトルの
電子ジャーナル23,678 タイトルの
電子ブック

2026年3月31日現在



経常収益 (2025年度)

8,114 百万円



経常費用 (2025年度)

7,468 百万円



外国人留学生数・留学生割合

472 人 41.7 %

2026年5月1日現在

留学生出身国数

23 か国

2026年5月1日現在

国際交流協定数

93 機関

2026年5月1日現在

グローバルな共同研究活動 (国際共著論文数)



出典：ELSEVIER社©SciVal (データ更新日：2026年5月27日)。円の大きさは海外研究機関所在国別の共著論文数(2016～25年)を表す。

JAIST未来ビジョン BEYOND

今を超え、未来を拓く。世界トップの研究大学を目指して。

北陸先端科学技術大学院大学(JAIST)は、
学部を持たない国立大学院大学としての特徴・特性を活かす
戦略的な経営と徹底した産学官連携・国際連携により、
今を超え未来を拓く独創的な研究とそれを通じた高度専門人材の育成を
共創的に推進していきます。

多様な人材が集い育ち新たな知を創り続ける拠点として、
また世界の知と人材をつなぎ循環・高度化させる中核として、
我が国の知の総和の向上と人類知性の発展に貢献し、
社会の変革を先導する世界トップの研究大学を目指します。

**Building
Excellence**

卓越性の構築

**Yielding
Originality**

独創性の創出

**Nurturing
Talents**

人材の育成

**Developing
Co-Creation**

共創の発展

BEYOND

THE FUTURE VISION OF JAIST

未来ビジョンを実現する4つの基本戦略 BASIC STRATEGY

1

研究 Building Excellence & Yielding Originality

世界トップレベルの研究の推進と新たな研究戦略・研究領域の創出

全学一研究科体制の下、独自の研究の高度化と先鋭化により、今を超え未来を拓く世界トップレベルの研究を推進します。国内外の大学、研究機関、産業界、行政等との広範な連携により、学際・融合・共創を基盤とする新たな研究戦略・研究領域を創出し、我が国の知の総和の向上と人類知性の発展を先導する中核拠点へと飛躍します。

2

教育 Nurturing Talents

高度専門人材の育成と人材循環システムの構築

多様な背景や専門性を有する学修者が相互に刺激し合い成長する環境と世界トップレベルの研究を通じた教育により、分野・組織・国境を越えて社会の課題を解決しイノベーションを創出する博士人材等の高度専門人材を育成します。高齢化社会の到来と労働力人口の減少を見据えて、企業等で一定期間実務経験のある社会人の学び直しと修了後の新たな分野への挑戦を可能とする大学院大学ならではの人材循環システムを産業界や行政機関とともに構築し、生涯にわたる知の形成と活用を支援する大学として、社会全体の人的資源の確保と高度化に貢献します。

3

共創 Developing Co-Creation

独自の社会連携システムによる共創の展開

世界トップレベルの研究に基づく徹底した産学官連携と国際連携により、地域や世界の課題を解決し新たな価値を創出する先進的共創システムを構築します。Matching HUBに代表される本学独自の社会連携システムを世界の知と人材をつなぎ循環・高度化させる新しい共創の取組として国内外に展開し、持続可能で強靱な社会の実現に貢献します。

4

経営 BEYOND

自律的経営体制の構築と発展

教学と経営が明確な役割分担の下で高度に連携・協働し、戦略の策定と意思決定を行う自律的経営体制を構築するとともに、それを担う人材の育成・活用を推進します。変化する社会環境に柔軟に適応しつつ進化・発展し続ける拠点として、従来のJAISTをはるかに超える研究の推進と人材の育成を可能とする研究・教育環境を構築し、社会の変革を先導する世界トップの研究大学を目指します。

新たに ビジュアルアイデンティティを 導入しました

その先端は、もっと尖る。

多様な知を結びつけ、独自の価値を生み出す。
私たちの学びは、研究者としての感性を磨く活動。
今ある最先端は、未来へのプロセスにすぎない。
さあ、研ぎ澄ませ、まだ見ぬ先端を創り出せ。

2026年10月、北陸先端科学技術大学院大学では、新たにビジュアルアイデンティティ（VI）を導入しました。VIとは、組織やブランドの価値やコンセプトを見える化し、一貫して伝えていくための仕組みです。

創立から35年、大学を取り巻く環境は建学当時から大きく変化しました。国内外の大学との競争が一層進む中、本学がどのような大学であり、どのような価値を社会へ提供していくのか、その特色や独自性を、より分かりやすく、一貫した形で伝えていく必要性が高まっています。

こうした認識のもと、学内関係者や学生代表との対話を重ね、本学らしさについて改めて考えました。その過程で見えてきたのが、本学を特徴づける「融合性」「先端性」「独創性」という3つの要素です。

新たなVIでは、本学の英語名称の略称「JAIST」をVIの核となるロゴマークに据え、未来にむけて、先進の領域へと登り続ける強い意志を、「先端」=「Advanced」の頭文字であるAに込めました。また、その形状には、建学当初から本学の建築意匠にも取り入れられ、キャンパスを象徴するモチーフの一つとなっている正三角形を採用しました。

ブランドカラーには、本学が位置する北陸の象徴である名峰・白山の峰を越えて広がる「空」の色を選びました。境界なくどこまでも続く空に、「北陸から世界のトップを目指す本学の志と、世界へと開かれた未来への思い」を重ねています。

ロゴマーク

JAIST

ロゴタイプ

北陸先端科学技術大学院大学
Japan Advanced Institute of Science & Technology

カラーインスピレーション



新たに導入したVIを通じて、本学がこれまで築いてきた価値や独自性を、学内外により分かりやすく、そして一貫した形で発信していきます。また、VIを適切に活用するためのガイドラインを整備し、学内の構成員をはじめ、本学にかかわる多くの方々が共通の考え方のもとで活用できる環境を整えました。これからも本学は、新たなVIとともに、本学ならではの価値を社会へ発信し、未来に向けて挑戦を続けていきます。

VI特設ページ



BEYOND Dialogue

変革の時代に 大学はどう進化するか

JAIST BEYONDと
UTokyo Compassから考える「知の未来」

単独から「共創」へ。

AI時代に求められる知の連携

寺野 本日は藤井先生と研究大学のこれからについてお話しできるということで大変嬉しく思っています。AI・DXの進展や少子化など大学をとりまく環境が大きく変化する中、JAISTでは2026年4月に新たな指針として「JAIST未来ビジョン BEYOND」を策定しました。一方、東京大学では藤井総長のもと「UTokyo Compass」を提示されています。今回、大規模総合大学と先鋭型大学院大学という大きくタイプの異なる両大学の視点から、2040年に向けた研究大学の未来像について話を進めていきたいと思います。国立大学協会会長としての立場からのご意見を伺いたいと思います。

藤井 AIの急速な普及により、誰もが知識を容易に得られるようになりました。そのため大学は、知識を単に教える場から、問いを立て、その解決のために知識を使いこなす力を培う場へと役割を変えてきています。その役割を果たすには、各大学の共創が大切だと考えています。全都道

府県にある国立大をはじめ、大学院大学、専門職大学、私立大学など、日本には多彩な特徴を備えた大学がいくつもあります。今までは各々が独自に活動を展開していました。今後は競争関係から共創関係に転換し、それぞれの強みや地域特性を持ち寄りながら、単独では対応が困難な課題に取り組むことが大切だと考えています。

寺野 大学同士を繋げる、知の連携という考えですね。

国立大学協会会長 東京大学総長

藤井 輝夫



国立大学協会会長 東京大学総長

藤井 輝夫

1993年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了・博士(工学)。2007年東京大学生産技術研究所教授、2015年同所長。2018年東京大学大学執行役・副学長、2019年同理事・副学長を務め、2021年より同総長に就任。2025年より国立大学協会会長。専門分野は応用マイクロ流体システム、海中工学。

寺野 稔

北陸先端科学技術大学院大学 学長

藤井 学問領域も今はダイナミックに広がっていますから、1つの大学でやりきれることには限りがあります。学部や研究科をまたいで、あるいは大学や専門分野の垣根を越えて協働し、それこそ新しい学問領域を切り拓いてほしいですね。

縦型(垂直)文理融合と大学間の 水平移動で多彩な人材を育成する

寺野 今のお話を聞いて、ご意見をうかがいたいのですが、JAISTでは縦型(垂直)文理融合を進めています。これは、人文学・社会科学系(文系)の学生には学部でしっかり文系の教育を受け、大学院でAIをはじめとする科学技術系の知識と方法論を身につけるといえるものです。JAISTでは学部2、3年時にインターンシップでJAISTでの教育・研究を経験し、その後に必要な準備をした上で大学連携に基づく推薦入学の制度を利用して入学する仕組みを立ち上げつつあります。この制度で育った学生は、しっかりした文系の素養を持

つ理系人材として社会で活躍することができると考えています。

藤井 素晴らしい試みですね。日本では同じ大学での垂直移動が多いですから、水平方向に移動を促すことは大学共創の考えにもつながりますし、研究の幅も広がるでしょう。日本の高等教育全体にもよい影響をもたらすと思います。

産学連携が可能にする 学びたい時に学べる環境づくり

寺野 もう1点お聞きしたいのは、社会人になってから修士・博士を目指すことにしています。JAISTでは働きながら修士・博士の学位取得を目指す社会人コースに250名を超える学生が在籍しています。

藤井 仕事をしながら博士を目指すのは容易ではないですが、強い意志をもって挑戦しているんですね。テクノロジーの進展が著しい時代になって、社会人の皆さんが学部にはいた頃とは様相が違うわけですから、現在の環境なら何ができるのかという探求心もあるでしょう。日本ではどうしてもストレート・ドクターが標準形というイメージが強いですが、学びたい時に学ぶというのが最善です。そういった体制を大学だけでなく企業側、産業界でも整えるべきだと思っています。国立大学協会が掲げる、博士号取得者を2040年までに年間3万人に増やすという目標にも繋がります。

寺野 JAISTでは、学生が企業との連携のもとに就学資金を支援していただきながら博士後期課程に進学し、研究を進めるという取組も10年ほど前から行っています。この取組のユニークな点は、企業の担当者に学生の研究指導にも協力してい

北陸先端科学技術大学院大学 学長

寺野 稔

1981年東京工業大学大学院化学環境工学専攻博士課程修了(工学博士)。専門は高分子化学、触媒化学。東邦チタニウム株式会社を経て、1993年北陸先端科学技術大学院大学材料科学研究科教授に就任。2020年より現職。

BEYOND Dialogue 変革の時代に大学はどう進化するか

ただくということで、これにより入社後の即戦力として学生を育てていただくことが可能となります。

藤井 なるほど、国立大学協会でもそういった産学連携の議論が盛んになされてきました。これまでは大学が人を育て、企業が受け入れる一方通行の構造でしたが、期待と実態とのミスマッチが往々にして生じています。在学中から企業の実践的な課題に取り組むことでそれらも解消しますし、もっと企業と大学がオーバーラップする動きが広がればよいと思います。地元企業と連携すれば、地域活性にもつながります。

スイスでの強烈な体験。

日本でも地域イノベーションをぜひ！

藤井 実は、地域連携では実体験があります。私はサバティカルで、スイスのヌシャテル大学マイクロテクノロジー研究所(IMT)に行っていたのですが、このヌシャテルという町は17世紀から続く時計産業の中心地でした。この町が凄いのは、1970年代後半のクォーツ時計の普及により機械式の時計産業が衰退の危機に直面した際、マイクロテクノロジーを核とするハイテク産業を発展させ、新たな成長基盤を築いたことです。小さな町なのですが、1990年代にはマイクロエンジニアリングのハブとしての地位を確立しました。現在は、スイスひいては欧州屈指のマイクロ・ナノテクノロジー関連のイノベーション拠点であるMicrocityや官民研究機関であるCSEM (Centre Suisse d'Electronique et de Microtechnique)が位置するなど先端技術を扱うスタートアップ企業が多数集結しています。

寺野 短期間のうちに、そのような小さな町がハイテク化を実現できたのには何か特別な理由があるのでしょうか？

藤井 それこそ大学と地域産業の強みがうまく結び付いたことが大きいと思います。たとえばスイス連邦工科大学ローザンヌ校(EPFL)とも連携して、マイクロテクノロジーの時計産業への応用を進めるなど、新たな試みが行われました。私がIMTで研究をしていた際も大学やCSEMの高度な実験施設をスタートアップ企業が利用できたり、スイス国内の企業が抱える課題を大学と一緒に解決したり、活発に産学が共創する環境がありました。大学の研究室で生まれたテクノロジーをビジネスにする起業も盛んに行われていました。

寺野 地域の特性を活かし、地元の研究者が企業と共創することで、スイス全体にイノベーションを起こしたわけですね。

オープンな環境と多様な連携で未来を拓く

寺野 ここまで大学全体の課題について話を進めてきましたが、研究大学で学ぶ人材に求められている独創性や卓越性についてはいかがでしょうか？

藤井 2つポイントがあります。1つ目は、いかにオープンな環境を創るかです。研究室や教室の中だけで学べることには限りがありますから、オープンな環境で多様な人たちと関わり、異なる分野の人との対話を心がけてほしい。2つ目は、現場で体験を積むことです。研究活動による達成感、地域貢献で喜ばれた時の満足感、失敗や挫折も糧になるでしょう。独創的なアイデアは突然生まれるものではなく種をまく土台が必要です。いろいろな経験をし、研究者としての土台を作り上げてほしいですね。AIに聞いたら何か答えが出てきたとしても、それで解決できるわけではありません。何かが足りなくなった時、これまでの自分自身の経験が役に立つかもしれません。そういう気づきが次の学びに生きてくるはずですよ。研究者としての原点は、この繰り返しにあるのだと思います。

寺野 さきほどのお話にあった大学間の共創が意味を持てきますね。日本各地域の大学は、その地域特有の文化や産業構造を基盤とする様々な特色を有しています。東京大学のような都市部の大学と連携し共創することで、多くの素晴らしい成果が生まれると思います。



藤井 伝承や工芸の世界は「解」があるわけではなく、深くて広いですから、そこに数学やサイエンステクノロジーが組み合わさって新しい領域が生まれたり、課題を共有したりできれば素晴らしいですね。日本を津々浦々見ていくと、地方特有の伝承や工芸が山ほどありますから、掘り起こして新たなテーマを見出せると面白いですね。

寺野 金沢や能登に代表される北陸の伝統工芸の世界においても、最先端の科学技術との連携で金沢金箔の薄さと輝きの秘密を原子レベルで解明したり、ナノ粒子の利用で九谷焼の深みのある色彩が創出されるなど、素晴らしい成果が生まれています。

藤井 次々と新しい領域を社会に実装しているのですね。偶然ですが、先日、加賀藩前田家の伝来文化財の特別展を東京国立博物館で拝見しました。中でも5代藩主・前田綱紀が日本全国から伝統工芸の技法や道具類を収集・分類させた標本集「百工比照」には感心しました。綱紀は学者肌の人物だったらしく、まさに未来の技術発展を見据えてこのような知の蓄積をしたのでしょうか、現代の研究者や技術者と通じ合っていると感じました。日本各地に眠る無数の「百工比照」を掘り起こし、次の時代の知恵へと昇華させていく。これからの大学に求められる未来像のひとつかもしれませんね。



自由度が武器の小規模大学院大学が起こすイノベーション

寺野 最後に、国立大学協会会長としての藤井先生に日本の大学院、特に大学院大学が今後どうあるべきかについてご意見をお聞きできればと思います。

藤井 大学院大学のシステムは、修士だけでなく博士まで見通した学びを提供していく上で重要な役割を担っています。JAISTが進める水平移動による学部からの入学や社会人プログラムなどは、まさに学びたいタイミングで大学院教育を受けられるシステムとして注目しています。また、企業と共同で現場レベルの、それも実践にかなり近いところで研究をされているのも素晴らしいです。東京大学とも共同指導のようなかたちや、新たな研究領域を拓くような協働ができれば面白いと考えていますので、今後ともぜひよろしく願います。

寺野 JAISTの強みは学部がないという自由度ですから、この自由度をもっと活用していきたいと考えています。例えば東京大学の文系の学生がJAISTに入学して、博士前期課程でAIや情報の知識を身につけた上で、東京大学の文系の博士後期課程で研究を進めるといった水平連携なども実現させたいと思います。東京大学をはじめ国内外の多くの大学や企業との連携・共創の中で日本や世界の発展に貢献してくれる人材を育成していきたいと考えています。本日はまことにありがとうございました。(2026年8月実施)

対談に同席して

独創性を未来へつなぐ大学の役割

今回の学長対談では、JAISTが新たな未来ビジョン「BEYOND」のもとで進める研究、教育、社会共創の取組について、国立大学協会の会長である藤井輝夫東京大学総長から多くのご意見・ご示唆をいただきました。

JAISTの「BEYOND」と藤井総長が策定を主導された「UTokyo Compass」とには、大学の伝統や強みを生かしながら社会とともに新たな価値を生み出していこうとする共通の方向性があります。独創的で卓越した研究、高度な大学院教育、社会との共創を重視する姿勢は、両大学が今後の取組を進める上でも大きな柱となるものです。特に、博士人材の育成と活躍の場を広げる上で、小規模先鋭型の大学院大学であるJAISTが果たす役割への期待の大きさも感じられました。

藤井総長は、私の高校の先輩でもあります。今回のお話を通じて、独創性を大切にしながら、誠実に大学改革を進める姿勢を改めて身近に感じるとともに、JAISTが目指す未来への思いを新たにしました。



理事(研究戦略担当)・副学長

小泉 周

活動状況

Performance

- 15. 研究
- 21. 教育
- 25. 学生支援
- 27. 社会貢献
- 31. 経営
- 33. JAISTトピックス





研 究

科学研究費助成事業

2億 7,716万円

2025年度の科学研究費助成事業採択実績は、82件、2億7,716万円。
研究者一人ひとりの挑戦を支えるため、充実した研究環境と研究支援体制を整えています。

受託・共同研究の2025年度実績件数

受 託 研 究

48件

金額 7億 4,149万円

共 同 研 究

145件

金額 2億 6,199万円

大学発ベンチャー認定企業数

7社

※2026年3月31日現在

特許保有件数

117件

※2026年3月31日現在

JAISTの研究室

105

※2026年4月現在

10の研究領域が連携し、
分野横断的な研究を展開。
多彩なテーマに挑み、
新たなイノベーションを
創出しています。

研究ハイライト



1902年から120年以上解かれなかった難解パズルについて、正三角形を正方形に組み替えるには4つ未満のピースでは不可能であることを、鎌田斗南助教、上原隆平教授らが解明しました。その研究成果は、米国科学誌『Scientific American』が選ぶ「2025年の数学における10大ブレイクスルー」の一つとして紹介されました。



エルゼビア社が2025年9月19日に更新・発表した「標準化された引用指標に基づく科学著者データベース"Updated science-wide author databases of standardized citation indicators"」において、本学の教員8名が選出されました。本データベースは、エルゼビア社の文献データベース「Scopus」をもとに、22の科学分野・174のサブ分野で5本以上の論文を発表した研究者を対象に、被引用数などの指標を用いて評価したものです。各サブ分野で被引用数の上位2%に入る研究者が毎年選出されており、本学の研究力が国際的に高く評価されていることを示しています。

全学的な研究マネジメント体制の強化

ー基礎研究から社会実装までをシームレスにつなぐ体制へー

本学では、研究成果による社会課題の解決を加速するため、研究力の強化と社会実装を一体的に推進する全学的な研究マネジメント体制を整備しています。

2025年4月には、研究戦略を統括する「先端国際・社会変革推進本部」を新設しました。同本部は、大学全体の研究戦略の策定や研究拠点の形成、研究支援を担い、分野や組織を横断した研究マネジメントを推進しています。一方、2022年度に設置した「未来創造イノベーション推進本部」は、産学官連携や大型共同研究、技術移転を通じて研究成果の社会実装を推進しています。「知の創造」を担う先端国際・社会変革推進本部と、「知の社会実装」を担う未来創造イノベーション推進本部が車の両輪となり、基礎研究から社会実装までを一貫して支える体制を構築しています。

また、各研究拠点には明確な研究テーマと拠点長を配置し、拠点長には学内外の研究者によるプロジェクトチームを編成する権限を付与しています。これにより、分野や組織の枠を超えた研究を機動的に推進し、本学の研究力を最大限に発揮する体制を整えています。

2025年7月には、世界トップレベルの研究者が集い、卓越した研究を推進する研究拠点「ネオ・エクセレントコア」として、次の2拠点を設置しました。

■ 超越量子未来アリーナ(taQumi)

量子センシング、総合知、量子マテリアル・デバイス、データアートメイク、ピコ顕微計測及び安全な量子通信の6つの先進分野で構成し、国内外の研究機関と連携して、単に物質的な豊かさだけでなく、精神的な豊かさをもたらすBest-beingな社会の実現を目指します。

※国内外の連携研究機関・大学: OIST、OXFORD、NICT、NIMS

■ 超越バイオメディカルDX研究拠点

健康長寿と質の高い生活を実現するための革新的な早期診断、創薬基盤ツール、再生医療用バイオマテリアルを開発することを目標とし、生物学、材料化学などの材料学的英知を結集して機械学習、DX、データサイエンスとの融合による全く新しい概念の創出を目指します。



Communicative
English

岡田 将吾

AI知性研究領域 教授



Special

INTERVIEW

子どもたちの学びを変える新たな教育技術を実現

AIで「英語で伝わる力」を見える化

01



with
AI

マワリム ケンディ オリビア

AI知性研究領域 講師



グローバル化の進展に伴い、英語で「話す力」や「伝える力」の重要性はますます高まっています。一方で、日本をはじめとする英語を母語としない国々では、小中学生が自身の英語コミュニケーション力を客観的に把握し、改善につなげる機会は限られています。私たちは、英語を「正しく話す」だけでなく、「相手に伝わる」コミュニケーションを支援する新たな教育技術の実現を目指し、研究に取り組んでいます。

本研究では、446名の小中学生への英語インタビューから得られた音声、表情、発話内容、会話のテンポなど、多様なデータをAIで統合的に分析し、英語コミュニケーションスキルを推定する機械学習モデルを開発しました。本モデルは、米国ニュージャージー州プリンストンに本社を置く教育・人材ソリューション企業ETS (Educational Testing Service) との共同研究により実現したもので、国際的な知見を取り入れながら研究を進めています。

研究では、発話内容だけでなく、声の特徴や表情の変化、視線、会話のテンポといった、人がコミュニケーションの中で自然に用いている多様な情報に着目しました。これらをAIで統



合的に分析する「マルチモーダル解析」を導入することで、個々の要素を個別に評価するのではなく、それらが複雑に関係し合う「実際の会話の質」を捉えることに成功しました。

従来の英語教育では、発音や文法の正確さが重視される傾向がありました。しかし、実際のコミュニケーションでは、表情や話し方、会話の間の取り方など、非言語的な要素も重要です。本研究では、こうした「ふるまい」を含めて分析することで、英語コミュニケーション力を約83%の精度で推定できることを示しました。

本研究の目的は、単に英語力を評価することではありません。子どもたち自身が「自分の英語が相手に伝わっている」と実感し、自信を持ってコミュニケーションできるよう支援することにあります。今後は、この技術に対話型AIと組み合わせ、一人ひとりに応じたフィードバックを提供する「AI英語コミュニケーショントレーニングシステム」の開発を進めていきます。地域や学習環境に左右されることなく、誰もが質の高い英語コミュニケーション教育を受けられる環境の実現を目指しています。



子どもたちの学びを変える新たな教育技術

- ✓ 英語コミュニケーション力を約83%の精度で推定
- ✓ 音声・表情・発話内容・テンポなどでAIで統合的に分析
- ✓ 対話型AIと連動し、ひとりひとりに最適なフィードバックを提供



データ収集 (英語インタビュー)

Vericant インタビュー



小中学生 インタビュアー

対象: 小中学生 446名
米国ETS (Educational Testing Service) との共同研究



昨日、動物園に行ったんだ。



昨日、動物園に行った！とても楽しかった。本当に大きな象を見たし、象はとっても面白かった！

マルチモーダルデータ

音声
(声の特徴・発話のリズム)

表情
(表情の変化)

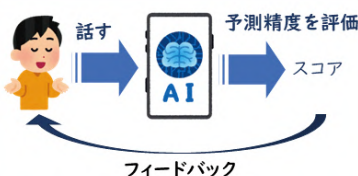
発話内容
(語彙・文法・内容の適切さ)

視線・注視
(視線の動き・相手の注視)

会話のテンポ
(間の取り方・話す速さ)

単に正確なだけでは、効果的なコミュニケーションを測ることは難しい

AIによる統合分析・英語コミュニケーションスキルの推定



英語スピーキング評価 (SEE) スコア

- 広範性:** 多様な話題で適切な語彙を使う
- 正確さ:** 文法的に正しい文を作る
- 流暢さ:** スムーズで自然な話し方
- 姿勢:** 会話に積極的に参加する
- 一貫性:** 論理的な流れで考えを明確に伝える

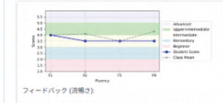
評価基準は0~6段階で、会話において「正確かつ効果的に意思疎通ができるか」を測定

可視化されたスコアとフィードバック

小中学生の「英語コミュニケーション力」で「見える化」



(例) 詳細な評価



ある小学生のスピーキング評価結果は、アセスメント結果から明らかです。これは、その学生が「スピーキング」のスキルを向上させるためのフィードバックを提供するためのものです。

ある小学生のスピーキング評価結果は、アセスメント結果から明らかです。これは、その学生が「スピーキング」のスキルを向上させるためのフィードバックを提供するためのものです。

ある小学生のスピーキング評価結果は、アセスメント結果から明らかです。これは、その学生が「スピーキング」のスキルを向上させるためのフィードバックを提供するためのものです。

Mathematical Models

吉岡 秀和

データ社会メディア研究領域 准教授



02

漁業との連携から生まれた数理モデル

地域と研究が支えるアユの未来

「清流の女王」と称されるアユは、日本の河川文化や生態系の根幹を支える存在です。しかし近年、全国的に資源量の減少が深刻な課題となっており、気候変動や河川環境の変化がアユに与える影響への関心が高まっています。私は、この多面的な価値をもつ貴重な水産資源であるアユを次世代へと引き継ぐため、島根県の一級河川・斐伊川(ひいかわ)を舞台に、数理科学の力でアユの成長・回遊ダイナミクスを解明する研究に取り組んでいます。



本プロジェクトの核となるのは、研究者と現場との継続的な「対話」と相互進化です。斐伊川漁業協同組合との10年以上にわたる産学連携により、研究者だけでは決して得られない、長期的かつ高精度・大規模な体重データを収集することができました。この貴重な一次データに基づき、個体ごとの成長のばらつきを数学的に記述できる独自の汎用モデルを構築しました。

この数学モデルを用いて最新データを解析したところ、衝撃的な事実が浮かび上がりました。2024年のアユは、夏から秋にかけて著しく成長が遅れ、9月末時点の平均体重は過去調

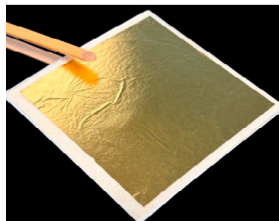
査年の6~7割程度にとどまることが明らかになりました。さらに、自ら設置した水位・水温計の記録と照合した結果、近年の夏季最高水温の上昇と、2024年の記録的な少水量が成長不良の大きな要因である可能性が高いことが示唆されました。アユの産卵数は体重に比例するため、この生育不良は翌年以降の資源量にも影響を及ぼす重要な問題です。

私たちの強みは、数理モデルという「理論」と、地域に根差した「フィールド調査」が両輪となっている点にあります。今回構築したモデルは、データが整備されれば全国の河川へ応用可能です。今後、環境変数と成長の関係をより詳細に分析することで、気候変動下における水産資源管理の意思決定を支援する強力なツールへと発展させていきます。一朝一夕には築けない地域との信頼関係を礎に、科学の力で豊かな自然と地域経済の共生に貢献することを目指します。



金沢金箔が生み出す美しさの裏側

伝統工芸の“薄さ”の謎を科学で解明



金沢金箔は、わずか100ナノメートルほどという世界でも類を見ない薄さと、美しい輝きを兼ね備えた伝統工芸ですが、製造過程の科学的な仕組みには未解明な点が多く残されていました。私たちは、この伝統技術の本質を材料科学の視点から明らかにすることに取り組んでいます。

最先端の電子顕微鏡を用いて、製造過程を詳細に分析した結果、叩いて薄く延ばす工程において金の結晶が特定方向に配光する特徴的な構造が形成されることを明らかにしました。また、一般的な金属とは異なる原子レベルでのすべり機構（変形の仕組み）が働くことで、極めて均一な薄さが実現されていることも分かってきました。

さらに、金箔を和紙で挟んで叩く伝統的な



工程が、加工時の温度上昇を抑え、材料の性質変化を防ぐ重要な役割を果たしていることも確認しています。長年受け継がれてきた職人の技術が、科学的にも合理性を有していることを示せた点は大きな成果です。

伝統工芸の価値を科学的に裏付けるとともに、その知見を文化財の保存や技術継承にも活かしていきたいと考えています。また、極めて薄い金属材料の新たな加工メカニズムの理解は、電子材料や機能性薄膜など先端分野への応用にもつながる可能性があります。伝統と先端科学の融合による新たな価値創出を目指して研究を進めています。

03

*Demystified
by Science*

大島 義文

ナノマテリアル・デバイス研究領域 教授



教 育

融合科学への挑戦

－ Transdisciplinary Sciencesに向けた大学院教育の展開 －

将来が見通しにくい現代社会において、卓越した発想と行動力を基に社会を力強く導いていく「科学技術イノベーション人材」を養成するため、本学と金沢大学は、2018年4月に融合科学共同専攻を設置しました。イノベーションの源泉である「新たな知」の創造は、既存の科学分野を超えた複数の科学分野の“融合”から生まれるとの考えのもと、異なる専門分野の学びにも積極的に挑戦する“異分野融合型大学院教育”を両大学共同で実施しています。

2025年度に採択された「文部科学省『未来を先導する世界トップレベル大学院教育拠点創出事業』」では連携大学として参画し、金沢大学との融合科学共同専攻を始めとした大学院教育連携の実績をさらに充実させ、博士人材育成・輩出モデルの実現を目指しています。

北陸先端科学技術大学院大学

先端科学技術研究科

金沢大学

新学術創成研究科

共同教育課程（黒枠内で同一の教育カリキュラムを持つ）

カリキュラム

融合科学共同専攻

- 博士前期課程（2年）
- 博士後期課程（3年）

先端科学技術専攻

カリキュラム

融合科学共同専攻

- 博士前期課程（2年）
- 博士後期課程（3年）

人間社会環境研究科、自然科学研究科 医薬保健学総合研究科

融合科学共同専攻ならではの特徴

1つのカリキュラム

本学と金沢大学の両大学によって、**1つの教育課程(カリキュラム)**を共同で編成しています。修士レベルから博士レベルまで5年間を通した体系的な教育プログラムを準備しています。

2つの大学の強み

両大学がそれぞれ得意とする分野の科目を提供し合うとともに、**異分野融合型の教育研究に対して強い意欲と多くの実績を有する教員を専任教員として配置**しています。

3つのチャレンジ

異分野融合型の教育を推進する観点から、体系的な学修ができるよう、次の3つの枠組みを設定しています。学生は研究課題に応じて、いずれかの枠組みを選択し、それに応じたカリキュラムを履修します。

- I：ライフイノベーション
- II：グリーンイノベーション
- III：システムイノベーション

国際教育連携強化：「JAIST・協定校接続プログラム」の推進

2024年度から開始した「JAIST・協定校接続プログラム(JUMP)」は、2025年度に2年目を迎え、連携協定校の拡充を図るなど着実に事業を推進しています。本プログラムは、協定校の学部3・4年生を短期インターンシップ生として本学に受け入れることにより、協定校教員と本学教員との共同研究プロジェクトの創出や国際共著論文の発表につなげることを目的としており、両大学間における国際的な教育・研究連携のさらなる強化が期待されています。

2025年度には本プログラムを通じて6名の学生が本学博士前期課程へ入学し、人材育成及び優秀な留学生の確保という観点からも着実な成果を上げています。

JAIST・協定校接続プログラム覚書締結校一覧

(2026.4現在)

協定校	国・地域名	締結日
インドネシアコンピュータ大学	インドネシア	2024.10.15
マレーシア国民大学	マレーシア	2024.11. 4
マヒドン大学工学部	タイ	2024.12.11
国立東華大学	台湾	2025. 7.18
タマサート大学シリントン国際工学部	タイ	2025.11. 6
スリウィジャヤ大学	インドネシア	2025.11.28

AWIST 2025

(The 13th ASEAN Workshop on Information Science and Technology 2025)を開催

2025年11月6日～8日、AWIST 2025(The 13th ASEAN Workshop on Information Science and Technology 2025)を開催しました。

AWISTは、本学及びASEAN諸国の協定校の教員・学生が参加する、情報科学分野を中心とした国際研究交流フォーラムです。毎年、協定校が持ち回りで開催しており、2025年は本学が主催校を務めました。

「Transforming Education and Research: Fulfilling the University's Role in the Super Intelligence Generation」をテーマに、従来の参加機関に加え、JAIST・協定校接続プログラム(JUMP)の協定校からの研究者を招き、国際的な研究交流のさらなる発展を図りました。

また、開催期間中には、JAIST SPRING/BOOST国際シンポジウム、JUMP参加大学の担当教員による意見交換、海外同窓会代表者とのセッションも開催しました。これらの取組を通じて、研究交流、人材育成、国際ネットワークの強化を推進し、グローバルな知の共創基盤の形成につなげています。



JAIST SPRING/BOOST国際シンポジウム



参加者による集合写真



Leiden University, Jaap van den Herik名誉教授



Xidian University, Gao Xinbo学長

文部科学省 2025年度「未来を先導する世界トップレベル大学院教育拠点創出事業」に本学が連携大学として参加

本学は、文部科学省2025年度「未来を先導する世界トップレベル大学院教育拠点創出事業」に採択された2件の事業に、連携大学として参加しています。

本事業は、国際的な教育研究環境の形成と産学連携による実践的な教育を通じて、豊かな学識と国際性、高度な実践性を身につけた博士人材を育成する大学院教育拠点の形成を目指すものです。さらに、学内資源の戦略的な配分等を通じて、質の高い博士人材を継続的に排出する教育基盤の強化を図ります。

本学が参画する採択事業は以下の2件です。

- ・金沢大学「多面的な連携が生み出す「知」の共創と往還による新価値創造人材の育成・輩出拠点」
- ・電気通信大学「日本版Industrial PhDによる未来共創リーダー育成拠点」

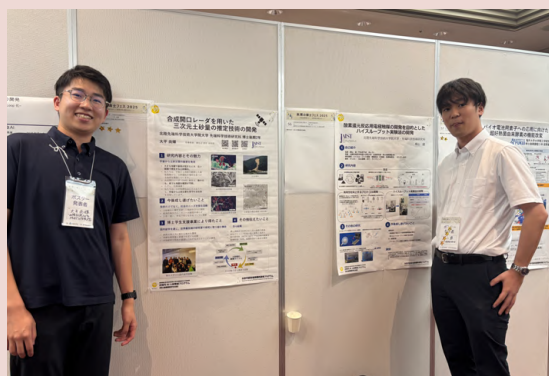
「次世代研究者挑戦的研究プログラム」イベント「未来の博士フェス2025」にSPRING研究員2名が参加

2025年9月4日、一橋講堂（東京都千代田区）で開催された「未来の博士フェス2025」に、次世代研究者挑戦的研究プログラムのSPRING研究員2名が参加しました。

本イベントは、博士後期課程学生や博士号取得者が持つ専門性や研究力などの強み・魅力を「見える化」し、広く発信することで、博士人材への理解や関心を高めるとともに、企業や官公庁等における博士人材の活躍促進につなげることを目的として開催されたものです。参加した2名は、それぞれ自身の研究テーマについてポスター発表を行い、研究内容や博士人材としての研究活動や魅力を紹介しました。

研究員の声

全国の大学からSPRING/BOOST研究員が集まり、ポスターセッションでは、各大学の活動や研究内容を報告しあい、大変有意義な交流の場となりました。また、パネルディスカッションや来賓の先生方のお話では「博士」に焦点を当てた興味深い議論が展開され、多くの気づきを得ることができました。今回、特に学生同士のネットワークを広げられたことは大きな収穫でした。



未来の博士フェス 2025

～知の挑戦者たちへ～ 未来を拓く博士の力～

2025.9.4 Thu
10:00～18:00 (開場 9:30)
会場：一橋大学一橋講堂（東京都千代田区一ツ橋 2-1-2）
開催形式：会場開催＋一部オンライン配信（YouTube Live）

開催趣旨

科学技術イノベーションによって社会課題を解決し、持続可能な未来を切り拓く鍵を握るのは、創造力と高度な専門性を備えた「博士人材」です。

今年で3回目となる「未来の博士フェス」は、企業と協力して、博士課程学生を応援するイベントです。

産業界、アカデミア、官公庁など多様な立場から、博士人材の価値と可能性を共有・発信し、共にその活躍の場を広げていきます。

当日は、博士課程学生によるショートプレゼンテーションに加え、博士人材の多様なキャリアや活躍の可能性を探るパネルディスカッション、「博士を大切に企業」によるピッチコンテスト、そして学生と企業が直接交流できるポスターセッション・企業ブースなど、多彩なプログラムを展開します。

博士人材と企業・社会の出会いが、新たな価値を生み出します。

その瞬間に、ぜひお立ち会いください。

プログラム

- 午前の部
 - 10:00 文部科学省挨拶
 - 10:10 JST 理事長講話
 - 10:30 来賓挨拶
 - 10:40 博士課程学生によるショートプレゼンテーション
- 午後の部
 - 13:15 博士を大事にする企業ピッチコンテスト
 - 14:00 パネルディスカッション
 - 15:45 ポスターセッション（学生ポスター・デモ展示 / 企業ブース展示）
 - 17:35 閉会セッション（閉会挨拶 / 表彰式 / 写真撮影）

参加費無料・事前登録制

詳細・申込み
<https://www.jst.go.jp/jiseda/mirainohakushi2025/>

申込締切

会場参加	2025年8月22日（金）
オンライン参加	2025年9月1日（月）

※ 当日は手荷物検査を実施する場合があります。お早めにご来場ください。

（主催）文部科学省 （共催）JST 科学技術振興機構

JAIST × Humanコースで整備した実験室

本学では、2024年度「大学・高専機能強化支援事業(高度情報専門人材の確保に向けた機能強化に係る支援)」に採択され、高度情報専門人材育成コース(通称、JAIST × Humanコース)を開設しました。2025年10月から学生の受け入れを開始し、2025年度は博士前期課程15名、博士後期課程5名が入学しました。

本コースでは、AIソリューション技術やAI倫理の知識を備え、AIと人が共生する社会における次世代AIの研究開発に取り組む高度情報専門人材を育成しています。

AI、インタラクション、サイバーセキュリティ、ヒューマンの4分野を横断的に学ぶカリキュラムを通じて、複雑化する社会課題を多角的に捉え、AIを活用した多様なソリューションの創出につなげる力を養います。

2025年度には、以下の実験室を整備しました。2026年度に開講する「知覚実験演習Ⅱ」(夏期集中講義)の演習で利用する予定です。



JAIST × Humanコース遠隔実験室



JAIST × Humanコース AV実験室

全学ファカルティ・ディベロップメント(FD)の取組

本学では、教育内容や授業方法の改善、教員の教育力向上を目的として、組織的・継続的なファカルティ・ディベロップメント(FD)活動を実施しています。

2025年度では3回の全学FDを実施し、教育上の課題や授業改善に向けた取組について、教員間で活発な議論が展開されました。こうした取組を通じて、学生の学修環境の充実と教育の質向上を推進しています。



第1回全学FDの様子

第1回

テーマ：シラバスと成績評価について

日時：2025年7月23日(水) 15:20~17:30

場所：マテリアル 小ホール(グループワーク形式)

参加人数：69名

第2回

テーマ：副テーマ研究指導・評価方法について

日時：2025年9月26日(金) 15:30~17:30

場所：マテリアル 小ホール(グループワーク形式)

参加人数：71名

第3回

テーマ：未来社会を共創する博士人材Society5.0における新たなコンピテンシーと大学院教育の挑戦

日時：2025年12月9日(火) 15:30~17:30

場所：マテリアル 小ホール(講演会形式)

参加人数：91名

学生支援

助成事業を活用し、認定課外活動団体への支援を実施

本学では、研究活動に加え、学生が多様な経験を通じて成長できる環境づくりの一環として、認定課外活動団体への支援を行っています。2025年度末時点で、体育会系8団体240名、文化系10団体105名の合計345名が課外活動に参加しており、前年度同時期と比べて40名以上増加しました。

2025年度は、公益財団法人スポーツ安全協会の助成事業を活用し、課外活動団体に必要な備品等の整備を支援しました。課外活動は、研究室や専攻の枠を越えて学生同士が交流し、協働する貴重な機会となっています。

今後も、学生の自主性を尊重しながら活動環境の充実を図り、研究以外の場でも主体性や多様なつながりを育むことができる、豊かな学生生活の実現を支援していきます。



留学生交流推進事業（日本文化研修）

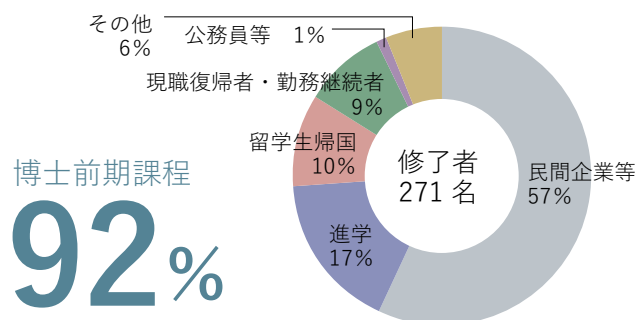
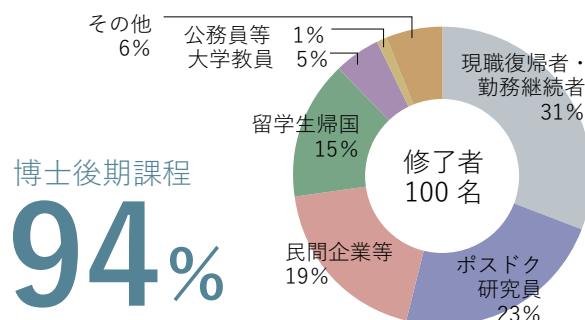
本学では、外国人留学生が日本や地域の文化への理解を深め、日本人学生を含む学生同士の交流を促進するため、「日本文化研修」を実施しています。本研修を通じて、多様性を尊重する姿勢や国際的な視野を養い、国際社会で活躍するために必要なコミュニケーション能力や実践力を身につけた人材となることを目指しています。

【2025年度実績】

- ・金沢市での和菓子作り体験と散策
- ・永平寺での座禅体験と大野市の散策
- ・加賀依緑園の見学と山中温泉ゆげ街道の散策



2025年度修了者の就職率／進路状況



●主な支援内容

- ・企業から届いた求人やインターンシップ等に関する情報提供
- ・インターンシップガイダンス、理系就職対策講座、合同業界研究セミナー、面接トレーニング等の開催
- ・キャリア開発カウンセラーによる個別就職相談
- ・修了生と連携した就職支援(キャリアメンター制度等)



学内合同業界研究セミナー



カウンセラーによる就職相談

外国人留学生向けの就職・キャリア形成支援

本学では、日本への就職を希望する留学生が、将来のキャリアを主体的に描き、社会で活躍できるよう、就職活動やキャリア形成を支援しています。

就職ガイダンスでは、日本の企業文化や採用慣行、企業が留学生に期待すること、求められる言語能力、就職活動の進め方などについて、留学生にわかりやすく情報提供しています。2025年度は、日本語・英語に加え、中国語によるガイダンスも実施し、多様な学生のニーズに応じた支援の充実を図りました。

また、北陸3県の企業でのインターンシップや就職(採用)試験への参加に必要な旅費、語学検定(日本語能力試験、TOEICテスト及びビジネス日本語能力テスト)の受験料を助成することで、日本企業への就職に向けた実践的なキャリア形成支援を後押ししています。



外国人留学生向け就職ガイダンスを3か国語(日・英・中)で実施

社会貢献

産学官連携の取組事例

TeSH事業の推進

文部科学省2023年度「大学発新産業創出基金事業・スタートアップ・エコシステム共創プログラム」の採択を受け、北陸地域の大学・高専発スタートアップ創出プラットフォーム「Tech Startup HOKURIKU(TeSH)」が発足しました。本学は主幹機関として、スタートアップ推進室を中心に事業運営を推進しています。

TeSHは、発足当初の12大学・3高専から、2025年度には新たに2大学が参画し、14大学・3高専へと拡大しました。また、自治体、支援機関、民間企業などの協力機関も31機関から109機関へと大幅に増加し、北陸地域の産学官金によるスタートアップ支援ネットワークが広がっています。

具体的な取組として、北陸地域の大学等が有する有望な研究シーズを発掘し、大学等発スタートアップの創出につなげるため、研究成果と事業化の間にあるギャップを埋める「ギャップファンドプログラム」を運営しています。2025年度は、応用研究を支援する「ステップ1」で24件(うち本学5件)、概念実証からスタートアップ組成までを支援する「ステップ2」で5件を採択しました。

さらに、これまで北陸地域のアカデミアとの接点が少なかったベンチャーキャピタル(VC)を事業化推進機関として多数迎え入れ、研究者とのマッチングを積極的に進めています。研究シーズの発掘から事業化までを一貫して支援することで、北陸地域における大学等発スタートアップの創出を加速し、北陸から国内外で活躍する企業や新産業の創出を目指します。

これらの取組を通じて、地域の活性化を促進するとともに、新たな人材需要や設備投資を生み出し、北陸地域の社会課題の解決に貢献していきます。



Matching HUB事業の推進

Matching HUB[®]

展示会形式の産学官金連携
オープンイノベーションイベント コンセプト

訪問活動

ニーズ・シーズの収集

ビジネスの
種

場の創出

多数同時マッチング

ビジネスの
芽

育成支援

産学官金連動

イノベーション

新製品・新事業

地方創生・地域活性化に向け、地域の大学、企業、行政、金融機関等をつなぐ「MatchingHUB」事業を推進しています。

本事業では、本学のURA(リサーチ・アドミニストレーター)が収集した地域の大学や企業等のシーズやニーズに加え、行政や金融機関等による支援を集約し、相互にマッチングすることで、新製品や新事業につながる「種」を数多く生み出すことを目指しています。

●Matching HUB Hokurikuの開催

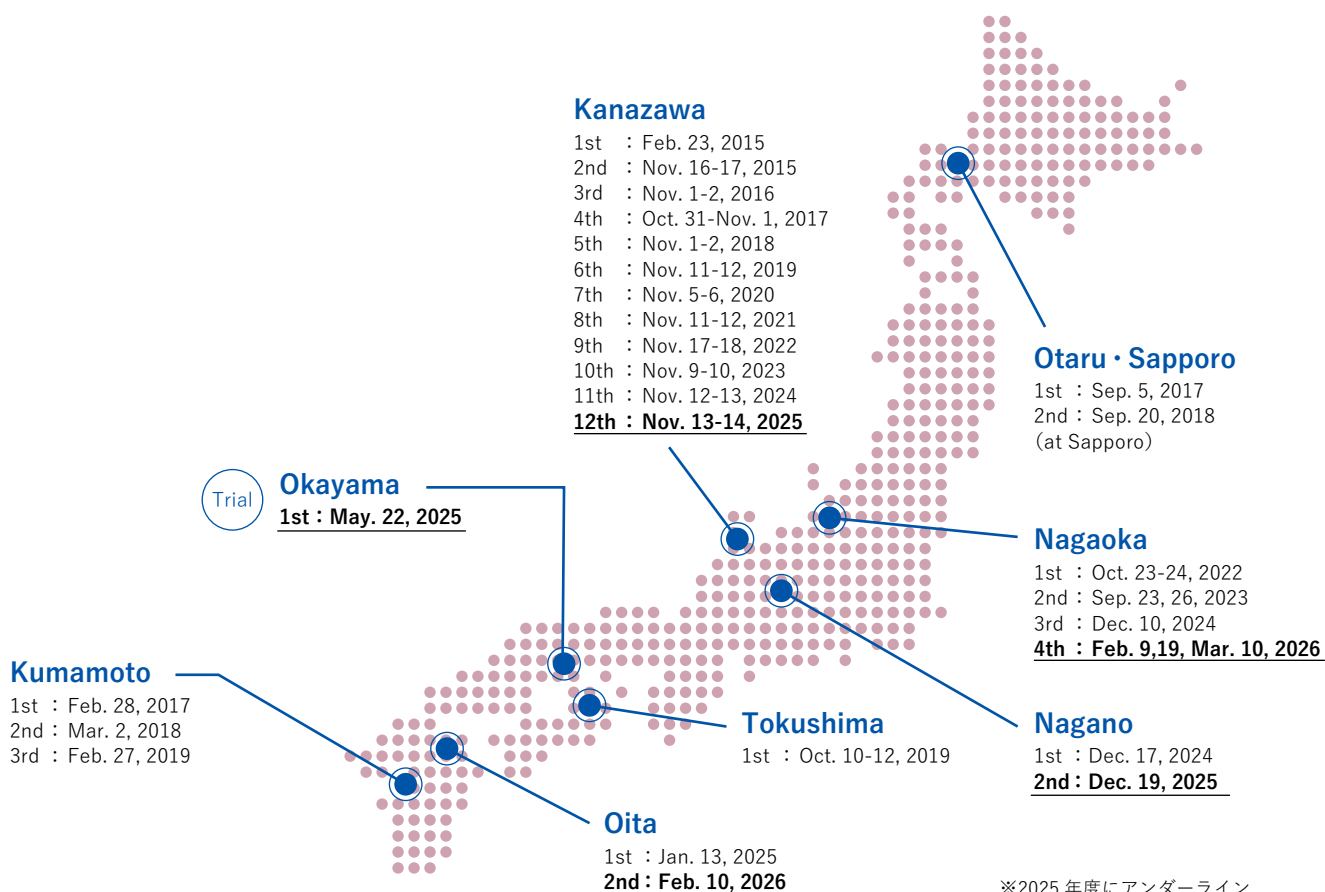
2025年11月13日・14日の2日間、ANAクラウンプラザホテル金沢において、第12回目となる「Matching HUB Hokuriku 2025」を開催し、延べ1,898名が参加しました。2日目のパネル展示では、北陸3県を中心に全国各地からさまざまな業種の企業・団体が参加し、190ブースが出展されました。本学のURAが、産学連携や企業間連携に向けたマッチングを支援した結果、出展者アンケートでは、1社あたり平均2件以上の商談や共同研究などにつながる成果が報告され、多くのビジネスの「種」を生み出すことに成功しました。



●全国展開

「Matching HUB Hokuriku」で培った産学官金連携の実績と知見を基盤に、その仕組みを他地域へ展開する取組を進めています。これまでに、小樽・札幌、長岡、長野、徳島、大分、熊本での開催を実施しており、2025年度は、長岡で4回目、長野・大分で2回目の開催を行うとともに、岡山でトライアル開催を実施しました。

こうした地域を越えた展開を通じて、本学を核とした全国的な産学官金ネットワークの形成が進んでいます。今後も、各地域の特色や課題に応じた連携を促進し、地域間のつながりを広げながら、日本各地の地域活性化に貢献していきます。



復興支援タスクフォースの活動

2024年1月に発生した能登半島地震を受け、地域イノベーション推進センターは、被災地域の企業・団体を支援するため「復興支援タスクフォース」を設置しました。これまで「Matching HUB」事業で培ってきた地域活性化のノウハウと、北陸地域内外の産学官金のネットワークを生かし、地域企業の復興を支援しています。

2025年度は、能登地域の企業等を延べ150回以上訪問し、現地の課題や再建に向けたニーズを把握するとともに、本学や「Matching HUB」の出展企業とのマッチングを進めました。その結果、新たに3件の復興プロジェクトを創出し、具体的な支援につなげています。

2026年度には、七尾市において「Matching HUB Noto」の開催を予定しています。オープンイノベーションを活用した産業復興支援を進めるとともに、能登をフィールドとして、復興・防災・減災をテーマとしたアントレプレナーシップ教育を展開し、復興を担う次世代人材の育成を目指します。

今後も、本活動を通じて、地域産業の振興を図るとともに、能登地域との継続的なつながりを生み出し、関係人口・交流人口の拡大に貢献していきます。



JAIST 能登復興支援
タスクフォースロゴ

映画を通じた復興支援

能登半島地震と豪雨災害からの復興を描く映画『生きがい IKIGAI』（監督：宮本亜門氏）に、能登復興支援タスクフォースが撮影協力を行いました。地域とのネットワークを活かしてロケ地や機材調整を支援し、作品のエンドロールにもその功績が記載されています。

地域課題解決と創造的復興を支える産学融合拠点の整備（J-イノプラ3）

本学は、経済産業省の2024年度補正予算事業「地域大学のインキュベーション・産学融合拠点の整備（J-イノプラ3）」に採択されました。本事業は、地域大学の研究成果の事業化を推進する拠点を整備し、地域を核とした産業集積とイノベーション創出を通じて、地域経済の持続的成長に貢献することを目的としています。

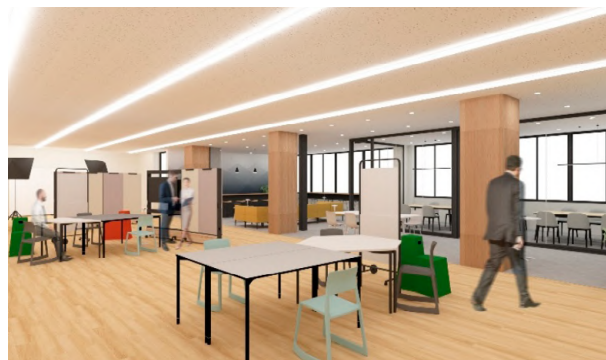
本学ではこれまで、能登半島地震の復興支援活動を通じて、被災地域のニーズと学内外の技術・人材シーズを結び付ける取組を進めてきました。本事業では、こうした活動をさらに発展させ、クライシスマネジメントを核としたスタートアップ創出のためのオープンイノベーション拠点の形成を目指します。

具体的には、「JAISTイノベーションプラザ」等の機能を強化し、インキュベーション環境や実証・検証機能の拡充、多様な主体による交流・共創を促進するオープンイノベーション空間の構築を進めます。これらの整備は2025年度に着手し、2026年度中の供用開始を予定しています。

この拠点を通じて、防災・減災や地域再生に関する知の集積と社会実装を進め、能登半島地震からの創造的復興に貢献するとともに、将来の自然災害にも対応できる持続的なイノベーション・エコシステムの構築を目指します。また、地域社会に新たな価値をもたらすスタートアップの創出を通じて、地域の活性化と持続的な成長につなげていきます。



大型LEDパネルを備えた実証・検証空間



多様な人々が集い、繋がるオープンイノベーション空間

自治体との包括協定

地域社会の持続的な発展と課題解決に向け、大学が有する人的・知的資源を活用し、自治体との連携を推進しています。その一環として、能美市、小松市、加賀市、野々市市、白山市、内灘町、中能登町および志賀町と包括的な連携協定を締結しています。

これらの連携先と協働し、以下のような取組を実施しています。

能美市 能美市子ども未来創造フェスティバル

能美市では、市内の小中学生がものづくりを通して科学への理解を深め、地域の未来を担う人材を育成することを目的に、「能美市子ども未来創造フェスティバル」を毎年開催しています。本学は共催機関の一つとして、実行委員会への参画等を行っています。

2025年度の同イベント内の「サイエンスセミナー」では、寺野学長が能美市内の3中学校の2年生を対象に講演を行い、学びの機会を提供しました。



能美市 職場体験学習

能美市では、学校・家庭・地域社会が一体となって、中学生が能美市内の企業や団体で職場体験を行う「職場体験学習」を実施しており、生徒が、自分の将来を見つめながら、集団や社会の中で、主体的に自己を生かそうとする態度や能力の育成に取り組んでいます。

2025年度は、8月に2名を受け入れ、事務局各課および附属図書館において、本学の教育研究を支援する様々な業務を体験しました。



小松市 サイエンスヒルズこまつとの連携

ものづくり・科学体験施設「サイエンスヒルズこまつ」では、青少年の理科離れ解消に向けた取組を実施しています。本学では、毎年「JAISTサイエンス&テクノロジー教室」として、地域の子どもや住民の方を対象に科学教室を開催しています。

2025年度は、材料の温度や材質の違いによる応答の違いについて学ぶ企画を行うとともに、同施設内に本学の研究紹介ブースを設置し、研究成果の情報発信を行いました。



経 営

組織体制（ガバナンス）

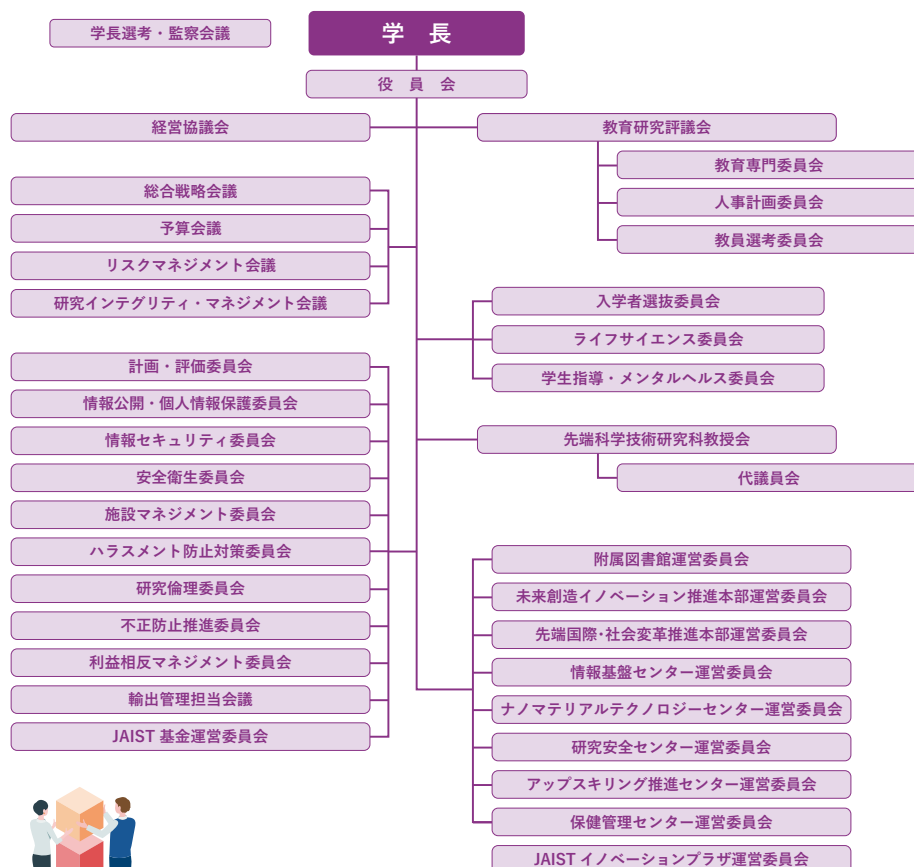
国立大学法人においては、法人の長である学長が法人経営における最終的な意思決定を担う一方、国立大学法人法に基づき役員会等における審議を経て決定する仕組みが整備されています。

本学では、役員会、経営協議会、教育研究評議会を設置し、学長のリーダーシップの下、経営面・教学面の多様な視点を取り入れた意思決定を行っています。役員会では、中期目標や中期計画等の重要事項を審議し、理事がそれぞれの担当領域における職務を担うことで、学長の意思決定を支えています。

また、本学独自の体制として、学長、理事、副学長、研究科長、副研究科長等で構成する「総合戦略会議」を月1回開催し、教育・研究・大学運営に関する戦略について、企画・検討や意見調整を行っています。法人執行部と教学側の代表者が継続的に議論することで、全学的な視点に立った戦略推進を図っています。

さらに、人事計画委員会、予算会議、入学者選抜委員会等の重要な会議は学長が主宰するとともに、2025年度は学長・理事懇談会を毎週開催し、執行部間の緊密な情報共有を進めました。こうした体制により、学長の強力なリーダーシップと組織的な合意形成を両立させ、迅速かつ確かな大学運営を実現しています。

本学における意思決定体制は、次の図のとおりです。



※2026.4.1 現在

積極的な情報発信

本学の魅力を多くの方に知っていただくために、さまざまなメディアを通じた情報発信を行っています。広報誌の刷新やフォトコンテストの開催など、学内外のコミュニティとの接点を広げる取組をご紹介します。

JAISTフォトコンテスト2025を開催

JAISTの日常風景や四季折々の自然など、多様な魅力を学内外へ発信するため、「JAISTフォトコンテスト2025」を開催しました。在学生や教職員に加え、修了生からも多くの作品が寄せられ、写真を通じて本学への思いや記憶を共有し、本学の魅力を再認識する機会となりました。

表彰式は10月25日に開催した「JAISTフェスティバル」内で実施し、受賞者へ賞状と副賞を贈呈しました。また、来場者の投票による「オーディエンス賞」を設けることで、多くの参加者が作品を通じて本学の新たな一面に触れ、魅力を再発見するとともに、学内外の交流を深める機会となりました。

受賞作品はWebサイト等で公開し、本学の教育研究環境やキャンパスの魅力を幅広く発信するコンテンツとして活用しています。



グランプリ
Student Life at JAIST
応募者：KHAN, Jawadさん

広報誌「JAIST NOW」

本学広報誌「JAIST NOW」は、2025年度から年2回の定期刊行へと刷新しました。発行頻度を高めることで、最新の研究成果や受賞情報、学内トピックをよりタイムリーに発信し、本学の活動を広く伝える広報媒体として充実を図っています。

2025年9月発行の第23号では、総合戦略担当の副学長に着任した小泉教授へのインタビューや、「JAIST変人ラジオ」の人気回を紙面化した特集を掲載しました。また、2026年3月発行の第24号では、変人ラジオのスピノフ企画として、ナビゲーターの越前屋俵太氏と小泉副学長による特別対談を掲載しました。

今後も「JAIST NOW」を通じて、本学の教育研究活動や大学の魅力をわかりやすく発信し、多様なステークホルダーとのつながりを深め、本学の「今」をより身近に、より多くの方へ発信していきます。



JAIST変人ラジオ シーズン2

越前屋俵太氏をナビゲーターに迎え、本学で研究に取り組む個性豊かな研究者たちの研究内容や人柄に焦点を当てた音声コンテンツ「JAIST変人ラジオ」を発信しています。「変人」とは“時代を変えていく人”を意味しており、研究の最前線で挑戦を続ける教員の思いや視点、研究の魅力を、親しみやすく軽やかな語り口で紹介するアカデミックなラジオ番組です。

シーズン1の反響を受け、2025年5月にはシーズン2の配信を開始しました。

9名の教員が出演し、それぞれの研究内容や、研究にかける思いを発信しています。

本コンテンツを通じて、研究成果だけではわかりにくい研究者の姿や研究への情熱を広く届け、JAISTの研究力や多様な知の魅力を社会へ発信しています。



地域の教育連携を強化

稲置学園・金沢星稜大学との協定を締結

2026年2月、学校法人稲置学園と包括連携協定を、金沢星稜大学と推薦入学協定を締結しました。教育・研究資源を活用した分野横断的な連携や、学士課程から大学院教育への接続強化を通じて、地域の人材育成に貢献します。



AI時代の人材育成を議論

初開催「JAIST東京フォーラム」

2026年3月、東京サテライトにおいて「JAIST東京フォーラム」を開催しました。生成AIの急速な進展を背景に、人文・社会科学分野の知とAIを融合した新たな価値創造や、AI時代に求められる人材育成のあり方を議論することを目的として、企業や大学関係者など約50名が参加しました。

フォーラムでは、寺野学長がAI人材不足という社会課題を踏まえ、産学連携による高度人材育成の重要性を提起しました。また、文部科学省からは、AI時代における高度専門人材育成に向けた大学の役割への期待が示されました。続いて、最新のAI技術動向や企業におけるAI活用の実践事例紹介に加え、本学が構想する人文・社会科学系人材を対象とした新たなAI教育プログラムの構想を発表しました。さらに、企業関係者や有識者とのパネルディスカッションでは、「企業が求めるAI人材像」や「産学連携の方向性」をテーマに、多角的な議論が交わされました。

本フォーラムは、社会のニーズを踏まえた新たな教育モデルの構築と、産学官連携のさらなる強化に向けた重要な機会となりました。今後も本学は、社会との対話を通じて教育・研究の高度化を図り、AI時代を牽引する高度専門人材の育成とイノベーション創出に取り組んでいきます。



AIで地域課題の解決に挑戦

学生チームが「クマ×共生ハッカソン」で総合優勝

2025年9月、石川県・金沢市主催「クマ×共生ハッカソン」で本学学生チーム「SoTA」がクマの出没情報を一元化するAIプラットフォームを提案し、地域の安全確保と人とクマの共生に向けた技術力が評価され、総合優勝を果たしました。



紙容器の新たな可能性を開拓 民間企業と共同で「パックポン」を開発

2025年10月、本学教員と民間企業が共同で、液体容器原紙を活用したカプセル形状の紙容器「パックポン」を開発しました。カプセルトイのプラスチック容器に着想を得て、形状設計に関する共同研究を進め、紙ならではの耐久性・耐水性や印刷性を生かした新たな容器を実現しました。イベントやギフトなどさまざまな用途での活用が期待されるなど、紙容器の新たな可能性を広げる取組となっています。



北陸4大学が連携を深化 新たな共創プラットフォーム「H4U」を始動

2025年10月、富山大学、金沢大学、福井大学と本学の北陸国立4大学は、連携拡大に向けた共同記者会見を開催し、新たな連携プラットフォーム「Hokuriku 4 Universities (H4U)」の構築を発表しました。

H4Uは、各大学がこれまで培ってきた協力関係をさらに発展させ、それぞれが有する特色や強みを結集することで、教育・研究、産学官連携、地域創生など幅広い分野で共創を推進する枠組みです。

また、2025年9月に採択された文部科学省「未来を先導する世界トップレベル大学院教育拠点創出事業」においても、4大学が連携して事業を推進していくことが示されました。各大学の教育資源と研究力を結集し、国際的に活躍できる高度人材の育成と新たな知の創出を目指します。

人口減少や地域課題の複雑化が進む中、大学には教育・研究に加え、地域社会の発展を支える役割が求められています。H4Uは、北陸地域の知的資源を結びつける新たな共創基盤として、産業界や自治体とも連携しながら、地域と持続的発展と世界に向けた価値創出に貢献していきます。



研究成果から新たな産業創出へ 大学発ベンチャーと学生が起業家賞を受賞

2025年10月、「スタートアップビジネスプランコンテストいしかわ2025」において、本学発ベンチャー企業であるBioSeeds株式会社が最優秀起業家賞を、博士後期課程3年の加藤裕介さんが優秀起業家賞を受賞しました。

BioSeeds株式会社は、小型・低コストで高精度なRNA・DNA分析装置「BioMuRun(バイオミューラン)」の開発・事業化を提案しました。本技術は、感染症検査や遺伝子解析の迅速化に貢献するものとして評価され、国内外での展開が期待されています。

また、加藤さんが提案した「豚精液の凍結保存事業」は、独自技術を活用して養豚業界における品種改良や国際流通の可能性を広げる取組であり、研究成果を社会課題の解決や新たな市場創出へつなげるビジネスモデルが高く評価されました。今回の受賞は、本学が推進する研究成果の社会実装とアントレプレナーシップ教育の成果を示すものです。研究者や学生が研究成果を社会的価値へ転換し、新たな産業創出に挑戦する環境づくりを通じて、イノベーション創出を推進していきます。

財 務 状 況

Finance

37. 財 務

41. JAIST基金・同窓会





貸借対照表

資産の部

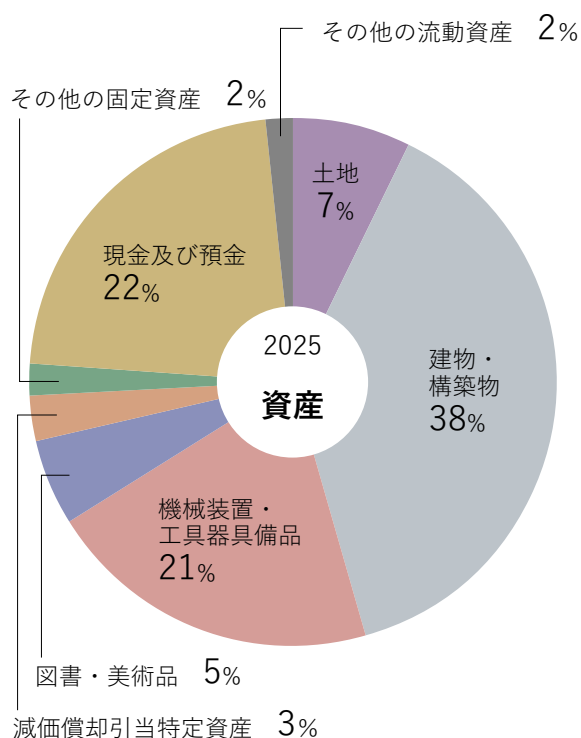
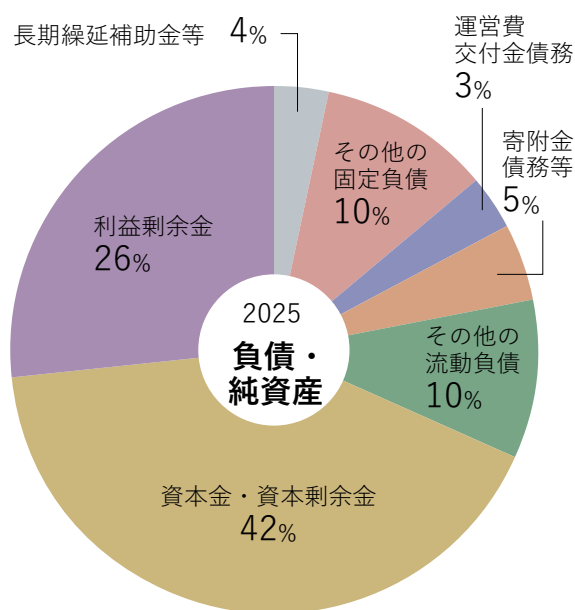
(単位：百万円)

勘定科目	2024年度	2025年度	増減
土地	1,462	1,462	0
建物・構築物	7,722	7,535	△187
機械装置・工具器具備品	2,755	4,016	1,261
図書・美術品	1,011	1,016	4
減価償却引当特定資産	468	548	79
その他の固定資産	567	380	△187
現金及び預金	3,709	4,365	655
その他の流動資産	145	309	164
資産合計	17,842	19,635	1,792

負債・純資産の部

(単位：百万円)

勘定科目	2024年度	2025年度	増減
長期繰延補助金等	462	707	244
その他の固定負債	1,096	2,034	937
運営費交付金債務	669	680	10
寄附金債務等	773	890	116
その他の流動負債	1,828	1,929	101
負債合計	4,831	6,242	1,410
資本金	16,017	16,017	0
資本剰余金	△7,662	△7,824	△161
利益剰余金	4,656	5,199	542
純資産合計	13,011	13,393	381
負債・純資産合計	17,842	19,635	1,792



2025年度は、2024年度と比較して、資産合計及び負債合計がそれぞれ17億円増加しました。

この増加の主な要因は、情報システム等のリース資産を更新したことにあります。これに伴い、資産では「工具器具備品」、負債では「長期未払金」がそれぞれ増加しました。

損益計算書

費用の部

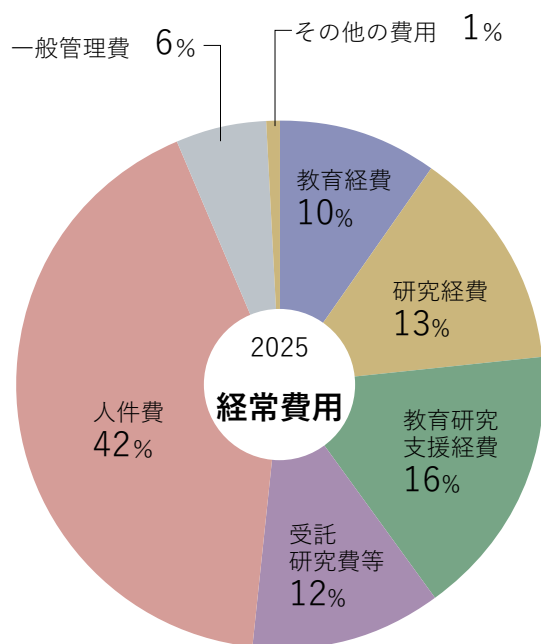
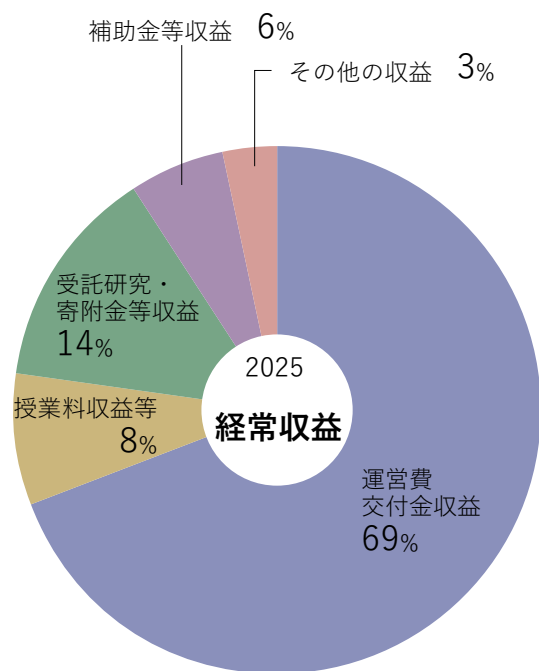
(単位：百万円)

勘定科目	2024年度	2025年度	増減
業務費	6,906	6,995	88
教育経費	733	746	12
研究経費	995	1,001	6
教育研究支援経費	1,242	1,243	0
受託研究費等	734	882	148
人件費	3,200	3,120	△79
一般管理費	462	428	△33
その他の費用	37	44	6
経常費用合計	7,406	7,468	61
臨時損失	43	38	△4
当期総利益	437	686	248

収益の部

(単位：百万円)

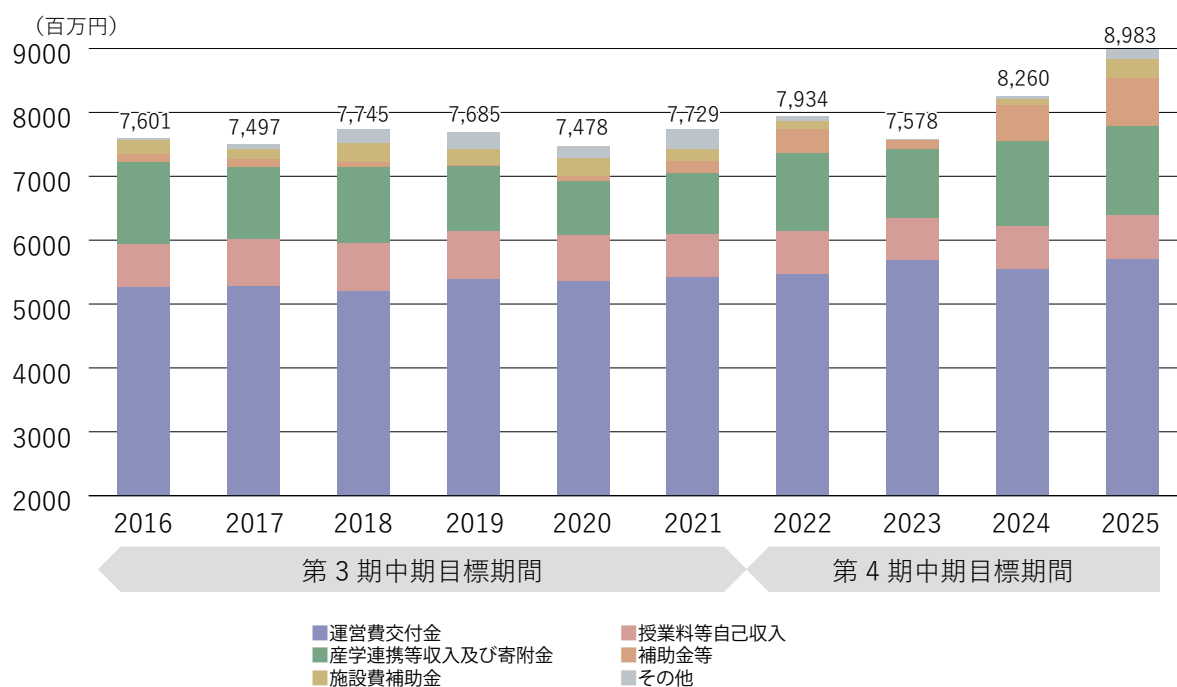
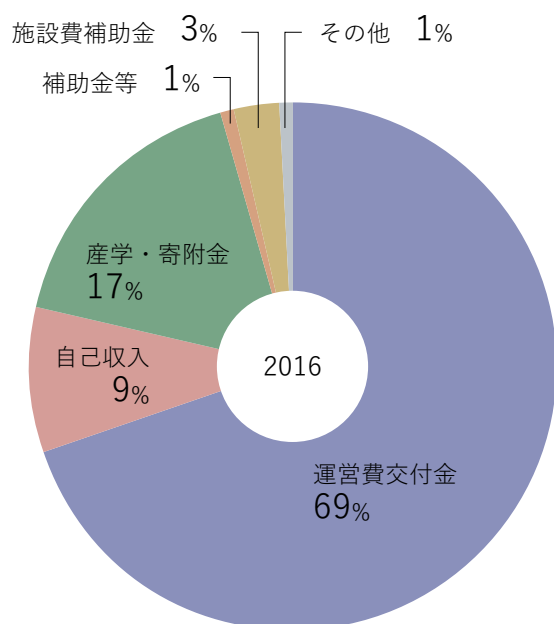
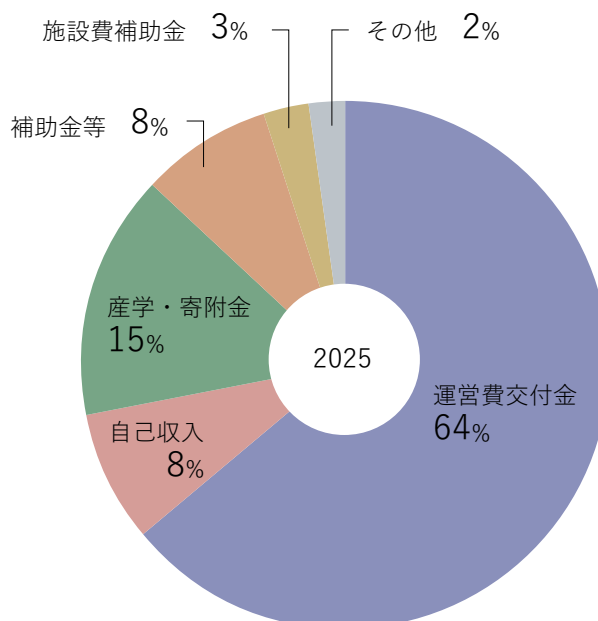
勘定科目	2024年度	2025年度	増減
運営費交付金収益	5,533	5,624	91
授業料収益等	647	660	13
受託研究・寄附金等収益	1,026	1,085	59
補助金等収益	377	476	98
その他の収益	244	266	22
経常収益合計	7,828	8,114	285
臨時利益	33	33	0
目的積立金等取崩額	26	46	20



2025年度の経常費用は、2024年度に比べて1億円増加し、経常収益は3億円の増加となりました。いずれも、受託研究費をはじめとする産学連携等収入や補助金等の受入額が増加したことが主な要因です。



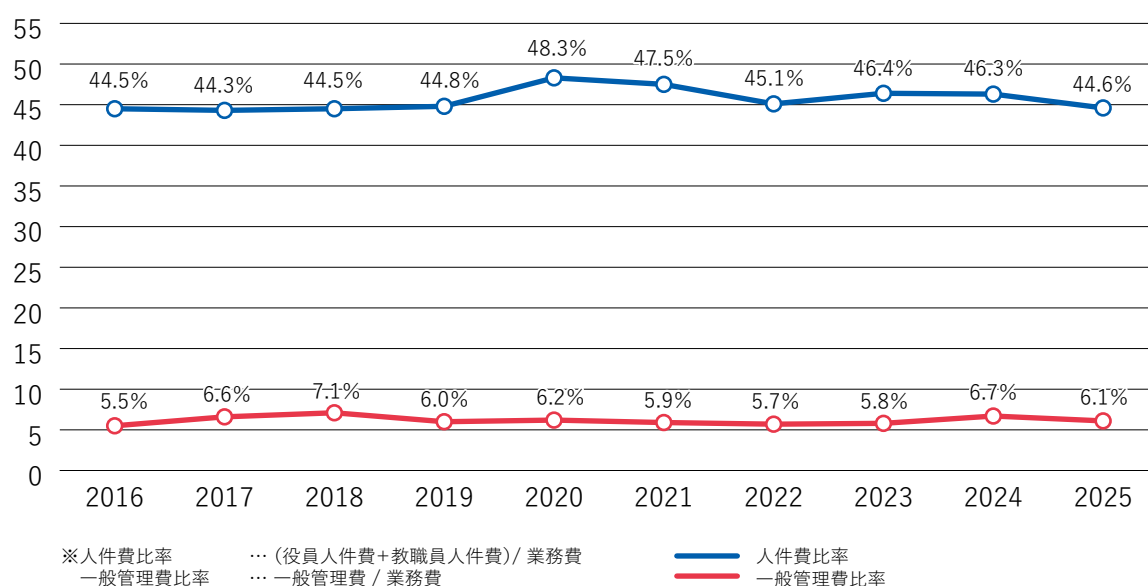
収入額の推移



収入額は、第3期中期目標期間(2016~2021年度)の平均が76億円であったのに対し、第4期(2022~2025年度)の平均は82億円と増加傾向にあります。

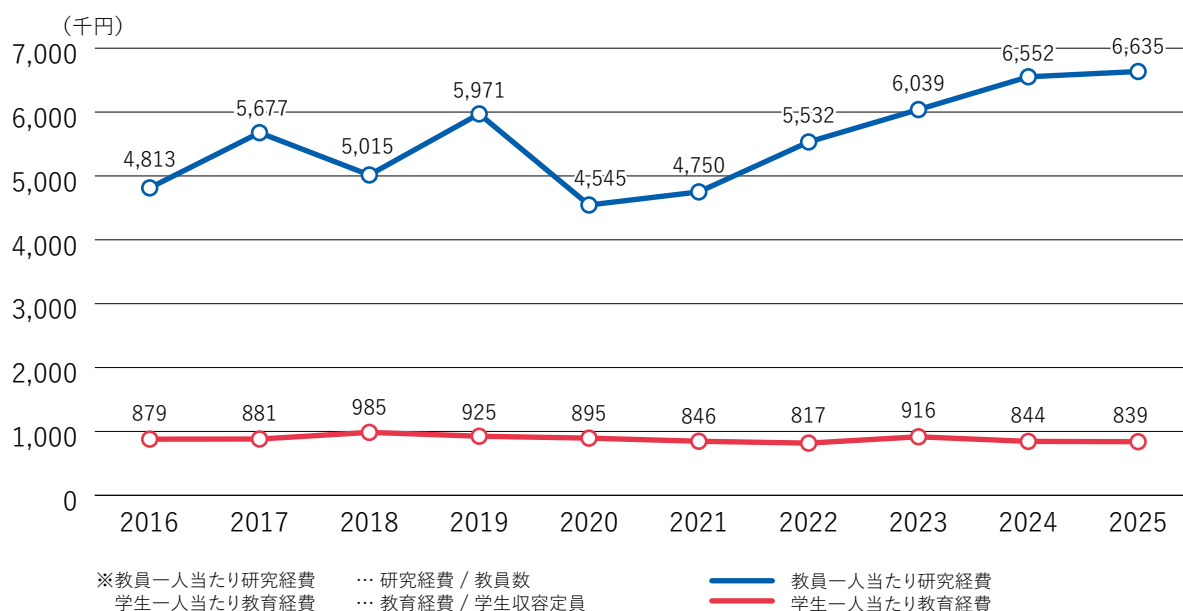
収入額の構成比率は、第3期初年度である2016年度と比較して、2025年度は「産学連携等収入及び寄附金」や「補助金等」の獲得額が伸びていることから、運営費交付金の収入額が増加している一方で、全体に占める比率は下がっています。このことは、自律的・安定的な財務基盤の構築に向けた取組の成果であり、多様な財源の確保により国から交付される運営費交付金への依存度が下がっていることを示しています。

「人件費比率」および「一般管理費比率」の推移



人件費比率および一般管理費比率は、いずれも比率が低いほど業務運営の効率性が高いとされる財務指標です。近年、これらの比率は横ばいで推移していますが、引き続き業務運営のさらなる効率化を実現するため、人件費および一般管理費の節減や、外部資金の獲得等に尽力します。

「教員一人当たり研究経費」および「学生一人当たり教育経費」の推移



本学は第4期中期計画において、世界的な研究大学としての地位確立を目標に掲げ、研究力強化に不可欠な施策や事業への重点的な予算配分に取り組んでいます。

その成果の一つとして、教員一人当たり研究経費が増加傾向にあり、戦略的な予算配分が着実に実施できているといえます。

JAIST基金・同窓会

社会とともに未来を創造する大学として、本学は教育研究活動の充実に取り組んでいます。その歩みを支えているのが、修了生や地域・社会をはじめとする皆さまとのつながりです。ここでは、本学の活動を支えるJAIST基金と、修了生のつながりを育む同窓会をご紹介します。

JAIST基金

本学では、優れた研究者・技術者の育成と世界水準の研究の推進を支えるため、「JAIST基金」を設置しています。本基金は、大学や公的機関等の研究者に加え、産業界における研究開発を担う高度人材の育成にも活用され、本学の先進的な教育研究活動を持続的に発展させる基盤となるものです。

皆様からのご支援をもとに、教育研究環境の充実や人材育成の強化を図り、国際的に競争力のある大学院大学として、社会とともに新たな価値を創出する役割を果たしていきます。

教育研究支援基金

教育研究推進、社会貢献、国際交流等の事業に対する支援を行います。

修学支援基金

経済的理由により修学が困難な学生を支援します。

JAIST基金への寄附の申し込み方法

インターネット決済(クレジットカード、コンビニ、Pay-easy)や、銀行振込、現金での寄附はQRコードからお申込みいただけます。



QRコードからお申し込みいただくと、ご自宅まで宅配業者が集荷に伺います。

読み終えた書籍等(DVD、CD、ゲームソフトを含む)を提供いただくことで本学の活動を支援いただく仕組みです。



就職支援における連携

2025年4月、就職支援の一環として、修了生である「キャリアメンター」と在学生との交流会を開催しました。キャリアメンターは、修了生の経験を活かし、在学生に就職活動やキャリアに関する助言を行うため、本学が修了生の有志に委嘱している制度です。

交流会ではキャリアメンターと学生がグループに分かれ、学生が積極的に質問しながら、先輩の就職活動や社会人としての経験、キャリアに関する助言に耳を傾けました。参加した学生からは、「社会で働く先輩方の話を聞き、業界のイメージが具体的になった」「自己分析の重要性について再認識した」などの感想が寄せられました。

本学では、修了生とのネットワークを生かしたキャリア支援を通じて、学生が主体的に進路を考え、自らの将来を切り開く力を育む取組を進めています。



キャリアメンターとの交流会

修了生との継続的な関係構築

同窓会主催の同窓会総会は、本学役員から大学の現状や今後の展望について報告し、修了生の理解と関係強化を図る貴重な機会として、毎年開催されています。

2025年11月には、国際研究交流フォーラム“AWIST2025”の開催に合わせて、本学初となる海外同窓会セッションを開催しました。タイ、インドネシア、ベトナムの各国同窓会代表者から、現地で活躍する修了生や同窓会の活動状況などが紹介され、海外で活躍する修了生とのつながりを一層深める機会となりました。

また、本学では「同窓会システム」を通じて、大学主催イベントの案内やメディア掲載情報など、大学に関するさまざま

な情報を随時発信し、修了生との関係構築に努めています。



同窓会総会

北陸先端科学技術大学院大学 統合報告書2026
JAIST Integrated Report BEYOND

2026年10月発行

【報告対象期間】

2025年4月～2026年3月

ただし、必要に応じて当該期間の前後についても
記載している箇所があります。

【編集・発行】

北陸先端科学技術大学院大学

広報・学生獲得推進室

【お問合せ】

北陸先端科学技術大学院大学

広報・学生獲得推進室 広報係

〒923-1292 石川県能美市旭台1-1

TEL : 0761-51-1031

E-mail : kouhou@ml.jaist.ac.jp

<https://www.jaist.ac.jp/index.html>



